



第3章 柿原政一郎と尾崎一男

1.はじめに

尾崎一男は零細な高鍋信用金庫を全国有数の預金量を誇る信用金庫に育てた名経営者として知られています。高鍋町長・柿原政一郎のもとで高鍋町助役を務めたとき柿原の薫陶を受け、柿原を尊敬するようになりました。大正2年生まれ tail 崎は石井十次と面識はありませんでしたが、柿原の石井十次に対する尊崇の念に強い影響を受けました。柿原なきあと石井記念友愛社を支え、石井十次の顕彰に尽力しました。

2.尾崎一男、高鍋で家業の公衆浴場を経営、鋸屑^{のこくず}を大八車で運ぶ



尾崎一男
すぐれた銀行家・柿原町政の名助役

尾崎一男は昭和 6 年に旧制高鍋中学を卒業し、法政大学経済学部に入學。招集されて、熊本に駐屯し終戦を迎えました。大阪で就職しましたが妻の体調不良で高鍋に帰り家業の公衆浴場を手伝います。風呂の燃料は^{のこくず}鋸屑でした。尾崎は毎朝早く製材所に出かけ、大八車に山盛り鋸屑を積んで帰りました。大學出の若者が麦わら帽子をかぶり^{じかたび}地下足袋をはいて大八車を^ひ挽く姿は評判になりました。高鍋信用組合長の^{くぼたつるじ}久保田鶴次は尾崎に、信用組合の専務に来ないかと言いました。

「鋸屑を運ぶ者がいない」と断ると、「人を雇え。それくらい給料を出す」といわれました。尾崎ははじめて金融業界に入りました。

3. 柿原町長から助役に 招請される

昭和 26 年 1 月、高鍋町長に当選した柿原から、突然助役を引き受けるよう要請されました。柿原は旧制高鍋中学卒業生を助役に据えたいと思い同窓生に人選を頼みました。同窓生が推薦したのが尾崎です。尾崎にとって晴天の^{へきれき}霹靂でした。彼は信用組合長の久保田に相談しました。久保田は「断って来る」と言って柿原町長のところに行きましたが、逆に説得されて帰ってきました。「尾崎君、四年間役場に行って来い。四年経ったらまた帰って

来い」と言いました。尾崎の人生はこれを機に変わります。37才でした。

4.柿原の下で町政を担い、多くを学ぶ

町長になった柿原は給料を受け取りませんでした。「給料をもらうと税金が高くなる」というのが理由でした。町政はすべて助役の尾崎にまかせました。尾崎にとっては慣れない町政でしたが、躊躇^{ちゅうちよ}することなく自分の判断で進めました。税金問題で議会で質問されると、柿原は「私が最も信頼する尾崎助役がやっているのだから心配ご無用」と答弁しました。尾崎としても奮い立たざるを得ませんでした。

5.黒谷坂^{くろだにさか}の難工事で柿原の恩情に救われる

町の消防長を兼務していた尾崎は、消防団員の制服を調達したいと考えていました。団員には制服がありませんでした。団員の士気の高揚のためにも揃いの団服が必要と考えていました。

そのころ町は黒谷坂の道路改修工事を予算化しました。尾崎は工事を高鍋町消防団 500 名に請負わせ、その賃金で制服を調達しようと考えました。延べ 1,000 人の作業員が必要という見積りでしたが、団員は素人なので四回ずつ出る計画で工事に着手しま

した。しかし始めると相当な難工事でした。地盤が粘土のため思ったより手間がかかり、予定の期日に完成できません。団員は家業や勤めがあり何日も休めません。そのうえ共産党員が現場に来て「新田原に通じる軍用道路建設反対」のアジ演説をして団員のやる気を削ぎました。尾崎は部長会を招集し協議の結果、工事中止が決まります。ところが警察署長から「共産党が高鍋の消防団を壊滅させたと全国に情報が流れている。消防団の士気にかかわる。工事を続けられないか」と強硬な抗議を受けました。尾崎は「これは大変な事態になった。町民からも批判を受け、議会でも問題化するだろう」と覚悟しました。

町長には相談せず尾崎の一存で進めてきた工事でした。尾崎は早朝に柿原町長をたずね、叱責を覚悟で報告しました。柿原は頷きながら聞いていましたが、思いがけない言葉を口にしました。「それは尾崎君、高鍋の消防団だからそこまで出来たのだ。大変だったね。よくやったね。このままでは団員に気の毒だから残りは専門業者にやらせ、あくまで消防団の手で完成したことにしてやれ。そこまで始末してやれ」と言いました。厳しい叱責を覚悟していた尾崎は、柿原の恩情あふれる言葉に感激しました。尾崎は後に「この人のためなら命はいらない。どんなことがあってもこの人のために

働こう。人生の師と仰いで行こう、という気持ちになった」と書き残しています。

6.古巣の信用金庫(信用組合から改組)に戻り理事長になる

昭和31年5月、高鍋信用金庫に戻り理事長となりました。当時の高鍋信用金庫は零細で、職員数は理事長を入れて22名でした。職員は尾崎を理事長と呼ばず「尾崎さん」と呼びました。預金残高は宮崎信用金庫の2億6,600万円に対してわずかに8,000万円でした。尾崎の言葉によれば「オーバーに言えば全国最低の信用金庫」でした。1,000円単位の融資に汗を流している時、出納係が「〇〇さんが預金50万円を引出したのでお金がありません」と駆け込んできました。融資の資金は別に用意してあったので、業務に支障はありませんでしたが、この事態に尾崎はショックを受け、1週間くらい重苦しい気持ちになったといえます。

財務基盤の弱いそんな信用金庫に監督官庁の九州財務局(熊本市)は危機感を持ち、局長は尾崎を熊本まで呼び出しました。そして日向興業銀行(現宮崎銀行)との合併を強く奨めました。

尾崎は返事をしませんでした。屈辱を感じました。そして逆に闘志を燃や

しました。^{がしんしょうたん}臥薪嘗胆の日々が始まり
ました。

7.「経営は教育である」を実行し、 若手行員の「心の教育」で人間 性を育てる

理事長の尾崎は「金融機関の商品とはなにか」を考えたとき、「顧客の選択基準は、金融機関の信用とセールスマンとしての職員の信用にある」ことに気がつきました。そこで「職員の誠実な人間性を育てること、社会から信頼される職員を育て上げること」を経営上の最重要課題としました。

理事長みずから全支店を廻り、「得意先係との顧客訪問」と「理事長懇談会」を始めました。昼は得意先係のバイクに同乗して得意先を訪問。得意先係に実地の教育指導をしました。夜は懇談会を開いて職員と懇談しました。スルメを肴に焼酎を飲みました。バンカーとしてのあり方や人間としての生き方について議論しました。尾崎にとって「経営は教育」であり「教育とは心の教育」でした。「心の教育」には尾崎自らが当たりました。職員との絆は強くなっていきました。

8.たゆまぬ努力の中、躍進がは じまる

成果は徐々にあらわれました。昭和

50 年には過去十年間の預金伸長率が全国信用金庫で第 1 位、貸出金第 2 位となり、全国の金融業界から注目されはじめました。昭和 53 年には資金量が 500 億円を突破し、同 59 年には資金量が 1,000 億円の大台に乗りました。平成 5 年には資金量が 1,500 億円となり、県下の信用金庫では他の追随を許さず、九州では第四位となりました。

国内では「北の遠軽(おんがる)、南の高鍋」と称されました。両金庫とも農林漁業を中心とした経済後進地という不利な経済基盤の地域でしたが、著しい業績の伸びを示したのです。

(＊遠軽：北海道紋別郡遠軽町・遠軽信用金庫)

9.石井十次像の建立と顕彰会の設立



高鍋中央公園にある石井十次像

昭和 56 年、高鍋信用金庫は創立 60 周年を記念して石井十次像を制作し、高鍋町中央公園に建立しました。あわせて西内天行著「信天記」復刻版を刊

行しました。

石井十次顕彰会は昭和 57 年に任意団体として発足しました。平成 2 年 4 月に正式に高鍋町の予算措置を得て、財団法人石井十次顕彰会が設立されました。尾崎一男は理事長に就任しました。石井十次を顕彰すると同時に、石井十次賞を創設し、全国の児童福祉団体に光を当てました。同 5 月、尾崎は喜寿を迎えるのを期に信用金庫代表理事会長を退任しました。退任後も友愛社の理事は続けました。講演に呼ばれると「柿原町長のもとで働き、薫陶を受けた話」をしました。

平成 11 年 10 月に名誉町民に推戴されました。平成 18 年 1 月 5 日逝去。享年 92 才でした

(つづく)

令和 8 年 8 月

文責：石川正樹

発行：社会教育課 文化係